

JETプログラム 20周年 記念式典について

(財)自治体国際化協会業務部

二〇〇六年一月二二日、皇太子殿下のご臨席をいただき、総務省、外務省、文部科学省、(財)自治体国際化協会の主催により「語学指導等を行う外国青年招致事業」(JETプログラム: The Japan Exchange and Teaching Programme)の二〇周年を記念する式典を開催した。式典には、国内外



↑皇太子殿下からのお言葉

で活躍する本プログラムのOB・OGをはじめ、関係者約六〇〇人が参加した。式典では、皇太子殿下からお言葉

をいただくとともに、本協会の香山充弘理事長が開会あいさつを行い、菅義偉総務大臣、麻生太郎外務大臣、池坊保子文部科学副大臣からそれぞれ各省を代表し主催者あいさつが行われた。

また、グレアム・ホルブルック・フライ駐日

英国特命全権大使から、『No Man Is An Island』と題した記念講演が行われた後、「豊かなる国際化へ向けて」をテーマとして、松本和也(NHKアナウンサー)、アグネス・チャン(歌手・教育学博士)、直山木綿子(京都市教育委員会学校指導課指導主事)、藤井喜臣(鳥取県副知事)、レイモンド・グリーン(駐日米国大使館政治部安全

保障政策課長)、田中健(財)自治体国際化協会事務局長)によるパネルディスカッションが行われ、本プログラム

の二〇年の実績を振り返るとともに、今後の展望などについて熱い議論が交わされた。

さらに、本プログラムの進展に功績のあった方々に、総務大臣表彰、外務大臣表彰、文部科学大臣表彰がそれぞれ授与され、本協会からは、JETプログラム二〇周年を記念して募集した「小論文コンテスト」と「記念ロゴ」の表彰を行った。

JETプログラムは、今年度で二〇周年という大きな節目を迎えることができた。これも関係各位の温かいご支援、そしてJETに参加していただいた皆さん方のためみない努力と熱意によるものと、感謝申し上げます。



↑右から菅総務大臣、麻生外務大臣、池坊文部科学副大臣、香山理事長



↑功労者等の表彰

在、JETプログラム経験者は五万人近くに上り、国別ではイギリスがかなりの比率を占めているといえます。一時は、JETプログラムがイギリスの大学新卒者の最大の雇用主でありました。考えてみれば、実に驚くべきことです。それだけでなく、日本の数十万人の中高生がJET参加者から英語を教わったでしょうし、そのほか学校や自治体でJET参加者と接した人もいるでしょう。

どのような尺度で見ても、見事な発展と成功を遂げたといえます。このプログラムを長年支援し、発展させる見識と先見性を持ち合わせていた日本の関係者を称えなければなりません。私は当初懐疑的でしたが、日本の複数の省、少なくとも三つの省と全国の多数の自治体が協力して成功させました。JETプログラムによって日本人の語学力が高まっただけでなく、イギリス、アメリカ、その他の国々の多数の青年が日本の生活を体験しました。日本の生徒たちはネイティブ・スピーカーが話す英語を聞き、話す機会を得ました。それは彼らの英語力を高めただけでなく、英語を学ぼうという意欲も高めたに違いありません。若いネイティブ・スピーカーと出会えば、その言葉を学びたいと思うようになります。私もそのような経験がありますし、大変重要な動機付けの一つでしょう。JETプログラム参加者自身が異文化の中で喜ばしい経験ができて感謝していると思いますが、お

そらく苛立ちや不安も感じたでしょう。都市部に派遣される人もいますが、多くの人が遠くの地方へ配属させられます。それでもほとんどの人が、素晴らしい経験をしたり、忘れられない経験だと言います。そして生涯にわたって日本の友人となります。これは、JETプログラム二〇年間の大いなる成果だと思えます。

「誰一人として 孤島ではない」

私は個人的に二つの理由でJETプログラムに感謝しています。第一に、東京にある英国大使館と大阪の総領事館の職員にはJETプログラム経験者が多数います。彼らは日本について知識があり、日本語もある程度知っています。その上、イギリスと日本との協力や友好を一人ひとりがとも真剣に考えています。JETプログラムで彼らは外交官になるための訓練を受けていたのです。第二の理由は、私の長男がJETプログラムに参加したからです。息子は埼玉で二年間、外国語指導助手を務め、存分に楽しみました。埼玉を希望したのは、本当は東京がよかったのですが、埼玉が東京に一番近かったからです。電車に四〇分乗れば上野や都心に出られるでしょう。でも埼玉ですごくいい経験をしました。そういうこともあってJETプログラムに感謝しています。

さて、私は今日の演題を、「誰一人とし

て孤島ではない」としました。その理由をご説明いたします。ここにご参加のネイティブ・スピーカーのほとんどの方は、この引用句をよくご存知でしょうが、日本人の皆さんには多少説明が必要かもしれません。

これは、一五七二年に生まれ一六三一年に亡くなったイギリスの詩人ジョン・ダンの「Meditation(瞑想)」に出てくる言葉です。ジョン・ダンには優れた恋愛詩を書きました。若いころの詩は、若い女性に宛てて書かれていました。年を重ねてからは神にささげる詩を書くようになり、宗教心を強めていきました。とはいえ、恋愛詩は書き続けました。「瞑想」は牧師時代の随想で、引用した句は次のように続きます。

「誰一人として孤島ではなく、誰一人として一人ですべてではない。誰もが大陸の一部、主たるものの一部である」「主たるもの」とは「本土」ということです。

今日参加されている皆様はイギリス人であれ日本人であれ、島というものをご存知です。島は海に囲まれ、本土から切り離されているという見方もあるでしょう。私たちはもちろん、イギリス人も日本人も別の見方をします。私たちが本土から切り離されているのではなく、本土が私たちから離れているのです。重要なのは、島が大陸から離れていることです。島がそれ自体ですべてであり、大陸の一部を成していないのです。



国も人も 相互関係の中にある

この例えを人間に当てはめると、よく分かります。私たちは皆、大陸の一員です。つまり人類の一員です。誰も排除するわけにはいきません。ほかの人たちの命は私たちと無関係ではありません。ですから、ジョン・ダン是这样言っています。他人の死もわれわれに関係すると。従って、誰一人として孤島ではないのです。これが今日、私を取り上げたいテーマなのです。

スーダン西部のダルフルでは、内戦が起きて数千人の子どもたちが飢えと病気で死んでいます。東南アジアの一部では強制的に売春をさせられている人々がいます。子どもを含め、世界中で数百万人がエイズとマラリアで死んでいます。どちらも予防できる病気です。私たちはなぜ、こうした状況を心配するのでしょうか。私たちの子どもたちは飢えてはいません。私たちはマラリアにかかっています。それなのに私たちにどう関係するのでしょうか。答えは、言うまでもありませんが、私たちも人間だからです。ほかの人たちに起きることは私たちにも関係があります。道徳的・人道的観点から見て、私たちは世界のどこかで起きていることを無視できないのです。ですからジョン・ダンが言うように、私たちは大陸の一部なのです。大陸とは人類のことです。ほぼ同じことが国についても言えます。



孤立が許されない 三つの分野

イギリスと日本は島国です。数百年の間、島国であることはとてもよいことでした。イギリスの子どもたちは、イギリスの歴史は一〇六六年に始まると教わったものです。なぜ一〇六六年なのか。よその国がイギリスに侵攻して成功したのは一〇六六年が最後だったからです。それから九五〇年間、いくつもの国がイギリスを侵略しようとしてきましたが、周囲の海とイギリス海峡とイギリス海軍が侵略を阻止してきました。そして、イギリスは自分たちの制度を自分たちのやり方で作ることができました。そうして民主主義、君主制、法の支配を組み合わせた社会を作り上げました。日本はイギリスよりさらに上をいっています。日本は二〇〇年以上、外国人をほぼ完全に締め出していました。その間、平和と繁栄を享受し、文化が驚くばかりに開花しました。しかし、ついにはうまく立ち行かなくなりました。黒船が来たのです。西欧はその二〇〇年の間に日本よりはるかに進んだ技術と政治制度を生み出していました。

今日のイギリスと日本を見ますと、私たちはさまざまな点で幸せです。両国ともずいぶん繁栄しています。生活水準が高く、快適な生活をしています。国内においても対外的にも平和です。私たちの政治制度は自由、民主主義、法の支配に基づいていま

す。自分の意見を言う権利があります。政府を選ぶ権利があります。しかし、もう島国の政策は役に立ちません。たとえ望んだとしても、他国に門戸を閉ざす政策に戻ることはできません。今やかつてとは違った黒船が至るところに出没しています。ここでは三つの分野、安全保障、経済、環境の三つに絞ってお話したいと思います。

まず安全保障についてですが、イギリスも日本も外国に侵略されることはなささうです。脅威は別の形でやってきます。島国であることでミサイルやテロから人々を守ることはできません。現在、日本で北朝鮮のミサイルが緊急の課題になっているのは、驚くべきことではありません。イギリスでは、市民はテロの危険をもっと意識しています。もともと、イギリスでも日本でも人々が不安を感じるのは、ミサイルやテロと核兵器などの大量破壊兵器が結びついているからです。イギリス人は北朝鮮のことを心配しているのかと時々聞かれます。確かに今のところ、北朝鮮はイギリスにとって日本ほど直接的な脅威になっていません。ミサイルが届く範囲に位置していません。北朝鮮は危険な技術を他国に売却してきました。そうした行為は、ヨーロッパが相当な権益を持っている東アジア地域に脅威をもたらしますし、大量破壊兵器の保有を考えている他の国に悪例を示す恐れもあります。ですから私たちは皆、北朝鮮の

行動を心配しなければなりません。北朝鮮がもたらす危険はこの地域だけの問題ではありません。世界に及びます。ほぼ同じことが間違いなくテロについても言えます。アメリカで起きた九・一一事件は言うまでもなく、世界の各地で起きています。テロは私たち全員にとって世界的な直接的脅威です。テロに立ち向かうには、グローバルなテロ対策を講じるしかありません。従って、孤立政策では安全は保障されません。

「われわれの経済は今やグローバル化している」というのは、既に耳慣れた言葉になりました。私たちの繁栄は現在、さまざまな国と国とのモノとサービスの自由な交換に依存しています。その自由な交換が中国、インド、ベトナム、その他の国々で数百万人の人々を貧困から救い出しています。もつとも、富裕国のこれまでの生産者が外国からの安価な輸入品に異を唱えるなど、抵抗もあります。問題は、人間の生活にかかわるほかの分野においてもそうですが、前に進むか後戻りするかです。同じ所にとどまっているのはとても難しい。過去の保護主義的な閉鎖経済に戻りたいとは誰も思いません。戻ればもつと貧しくなることを知っているからです。後戻りしないとすれば、前に進むしかありません。後退を避けようとするなら、貿易自由化への道を進む必要があります。だからこそ、世界貿易機関(WTO)でドーハ開発ラウンドをできるだけ早く再開することが不可欠

です。

その際、とても貧しくてグローバルな貿易にほとんど影響を与えていない国々を忘れてはなりません。豊かな国にいる私たちは、そうした国々の生産品に課している貿易障壁をすべて撤廃すべきです。とはいえ多くの場合、問題は貿易障壁だけではありません。生産能力も問題です。工業や農業を発展させて独自の富を生み出し、輸出できるものを持つよう手助けする必要があります。

もう私たちは大陸から孤立するわけにはいかないと思う第三の分野は、気候変動の問題です。世界は温暖化しつつあり、その主たる原因は人間の活動にあるというのが今日、科学者の一致した見方であります。科学者たちによれば、私たちが何も対処しなければ、気温が二〇五〇年までに二度以上上昇する確率は九〇%だといえます。たぶん私は二〇五〇年まで生きてはいないでしょうが、皆さんはかなりの方が生きておられるでしょう。気温が今より二度上昇すると、私たちはますます暮らしくくなります。そしてよくあることですが、最も貧しい人たちが最も苦しむことになります。



人類共通の利益に責任を負う

私たちがこの問題を考えるときによく使う言葉で、少々誤解を招きかねないものが

二つあります。一つは「長期的な」問題だということです。先ほど二〇五〇年と言いました。これはまだだいたい先です。そして時がたつほど状況は悪化し、顕在化するのとは間違いありません。一方、それに対して何かすべき時は、そんな先の「長期的」なことではありません。今すぐ行動すれば、妥当なコストで最悪の事態を防ぐことができます。しかし、あと一〇年もの間、何もしないで放置すれば、自分たちを救うのに奇跡的な技術の開発を待たねばならず、事態はさらに悪化し、多額のコストがかかることとなります。「長期的」な問題だということ少し誤解を招きます。今、行動する必要があります。もう一つは、実は「環境」という言葉です。環境とは、私たちが生きていく場所であることを忘れがちです。それを「環境」という言葉で呼んでしまうと、気候変動が政治やビジネス、経済、健康、さらには私たち自身の安全に影響することを往々にして忘れてしまいがちです。気候変動もグローバルな問題なのです。国際社会が力を合わせて行動する必要があると思います。どの国も問題解決に一役果たすことができますが、一国だけで解決していくことはできません。

従って経済、安全保障、グローバルな気候変動という分野では、孤島の要塞にこもって自分たちを守ることはもうできないのです。互いに協力しなければなりません。幸いにも私たちは既にそういうことを始



↑熱心に聞き入る参加者

めています。まさにそのための国際機関を作ってきましたから、互いに協力することができます。国連があります。世界貿易機関、世界銀行があります。そのほかにもこのような機関がいくつもあります。ですから、人類のさまざまな問題に取り組む機関が足りないというわけではありません。そうした機関を共通の利益のために有効に機能させるかどうかは、私たちの政治的意

思の問題です。
つまり、さらに大きな人類共通の利益というビジョンを描けるかどうかということになります。私たちは地域や国家、宗教、部族、あるいは経済構造で区分された特定集団の利益にとらわれることがあまりに

も多い。その格好の例が、気候変動について各国が協議を行ったナイロビでも見られました。国益、あるいは国益と称するものをめぐる駆け引きが強すぎて、私たちが直面している緊急の世界的問題に対処できないでいます。

今日、こうしたさまざまな利益を交渉で調整するのは外交官の仕事でしょうが、平和を保ち、共通の利益を推進するのは私たちの課題でもあります。とはいえ、必ずしもそうできるとは限りません。私は思うのですが、本当に苛立たしいのは、非常に狭い意味での利益にばかり目を向けて、より広範囲の真のグローバルな利益なるものに目が向けられていないことです。こうした問題を解決するには、多国間の合意がどうしても必要です。そのためのビジョンを掲げる必要があります。

そう考えますと、やはり私はジョン・ダンの言葉に、そしてJETプログラムに立ち戻るのです。問題の核心は、グローバルな利益を広範囲に見据えることができるか、自分たちの国や特定の集団を超えて視野を広げ、私たちは皆人間としてつながっていることと認識できるかどうかにあるからです。意見の違いがどのようなものであれ、私たちはお互いに責任があり、人類全体の利益に責任を負っています。至極明白なことですが、そうした認識は自然に生まれるものではありません。そうした認識に至るのは簡単なことではありません。しかし、

そう認識できれば戦争はなくなるでしょう。奴隷制や搾取もなくなるでしょう。もっと日常のレベルでは、人種差別や偏見がなくなるでしょう。



人と人とのつながりが 障害を乗り越える

私たちを集団に分けてしまうこうした障害を取り除くには、一つには若者たちにほかの文化を経験させることです。ヨーロッパの例を一つ挙げますと、フランスとドイツは過去一〇〇年の間に三回戦争をしましたが、両国の歴史的和解には大規模な青年交流計画が一役買いました。

もの考え方に影響を受け、偏見をなくせるのは若いときです。若いころは、新しい経験を受け入れることができます。その意味で、これはとても広い意味で言っているのですが、JETプログラムは特に意義があると思います。日本の子どもたちと外国の青年たちをつないでいるからです。日本の子どもたちはそこで初めて外国人と出会うかもしれません。また、自分たちとそれほど年が離れていない人から学ぶことができます。息子から聞いたことですが、息子は教えていた十代の子どもたちと同じようなことに関心があったので、互いに親しくなれたようです。彼はそれほど年が違いませんでした。

JETプログラム参加者について言いますと、世界各地からアジアにやってきました。

ヨーロッパやアメリカとは起源が全く違う文化に出会います。それまでの考え方に疑問を抱きます。それまでとは違った視点でものを見るようになります。一方、共通するものもいろいろあります。既にお話ししましたが、日本は欧米と同じく民主的な価値観が社会を支えています。生活の質も同じです。人間の誠実さや友情はある文化やある国に限らないことも日本で学びます。人と人の友情はあらゆる障害を越えるものです。従って、今日の講演テーマにかかわるすべての人にとつて、そのような経験は優れた教育となるはずです。それはつまり、私たちは同じ人間としてつながっているということです。



文化の違いを超えた 思いやりの心

ずいぶん硬くまじめな話になってしまいました。最後に文化のぶつかり合い、西欧文化と日本文化の喜ばしい出会いについて、私がとても気に入っている話を二つ紹介したいと思います。私が直接経験したことはありませんが、

アラン・ブースという名前だったと思いますが、その人が『佐多への道』（邦訳『ニッポン縦断日記』）という本を書きました。著者は日本の北端から九州の南端まで歩いたので、その道中、高速道路を歩こうとはもちろん思わなかったでしょうから、裏道を歩いて、日本の国を縦断したのです。村や小

さな町で宿泊しました。これはずいぶん前のことです。困ったことに、民宿の中には彼を泊めたくないと思うところもありました。見知らぬ外国人の男が一人というのは、宿屋の女将さんにとつて必ずしも理想のお客ではなかったのです。ある小さな町でのいい話があります。彼が町に着いて民宿に行くくと、満室だと言われました。二軒目の民宿でも満室だと言われます。彼が見る限り、その町には民宿が三軒しかなく、そこでも満室だと言われると、「違うでしょう。誰もいないじゃないですか」と彼は言い返しました。すると女将さんは、「そうですが、あな

たは外国人です。ここにはベッドはありません。床に寝なくてはなりません」と言うのです。外国人が床の上で眠れないことはよく知られていました。そこで彼は、これまでに日本を半分ほど縦断し、行く先々でたいていは床に寝てきたと話しました。すると女将さんは、「問題はお風呂です。ここには日本式のお風呂しかありません」と言いました。外国人が日本のお風呂を好まないこともよく知られていました。そこで彼は、日本のお風呂が大好きだと言いました。次は食事です。食事もお食しかありませんでした。外国人は和食を食べられないというのにも有名なことでした。彼は、世界の料理の中で和食が大好きだと言いました。寿司も好きだし、何でも大好きだから、和食でかまいませんと言ったのです。すると女将さんは極めつけの返答を思いついたか

のように、「私たちは英語がしゃべれません。日本語しか話せません」と言ったのです。それに對し彼は、この五分間、ぼくたちは日本語で話してきたじゃないですかと言いました。結局、女将さんは彼を泊めざるを得なくなりました。

これは二〇一三〇年前のことです。今では「Yokosai Japan」キャンペーンがあります。日本は外国人旅行者を歓迎しています。今の日本では同じようなことは起きないでしょうが、これはいい話です。

もう一つ、私が気に入っているのは、私の趣味はバード・ウォッチングなので、バード・ウォッチャーの話です。彼は鳥を探しに、ずいぶん遠い田舎の方まで行ったのですが、土砂降りの雨になり、バード・ウォッチングをあきらめました。バスで帰ろうとバス停までたどり着くと、次のバスは一時間半も来ないことが分かりました。雨に濡れながらバス停に立っていました。するといい考えが浮かびました。ヨーロッパではこういうとき、ヒッチハイクをするのです。車は走っていましたが、乗せてもらえたら助かると思ったのです。親指を立てて腕を振る合図をしながらか立っていました。ところが、それがどういう合図なのか、誰も知りませんでした。だから、どの車も通り過ぎていきました。しばらくそこに立っていましたが、どうにもなりません。ようやく一台の車が数m先で急停車しました。「ありがたい」と彼は思いました。後ろのドアが開き、小さな

女の子が降りてきて、深くお辞儀して彼に傘を手渡しました。女の子がもう一度丁寧にお辞儀をして車に戻ると、その車は行ってしまいました。

この話は二つのことを物語っていると思います。まず、二つの文化はとも違うと

いうことです。もう一つは、日本人は大変親切だということです。あの傘が貸した人の元へ戻ることはないでしょう。日本人は雨に濡れながら立っている外国人をかわいそうに思ったのです。こうした経験を人は忘れないでしょう。後々まで語り継がれる

でしょう。文化の違いによる全くの誤解であり、困惑してしまいますが、相手の言っていることがよく分からなくても人の親切はこうやって伝わるのです。
ご清聴を感謝申し上げます。

特集

パネルディスカッション 「豊かなる国際化へ向けて」

コーディネーター

松本和也（NHKアナウンサー）

パネリスト

アグネス・チャン（歌手・教育学博士）

直山木綿子（京都市教育委員会学校指導課指導主事）

藤井喜臣（鳥取県副知事）

レイモンド・グリーン（駐日米国大使館政治部安全保障政策課長）

田中健（財自治体国際化協会事務局長）

松本 皆様、どうも初めまして。NHKのアナウンサーの松本和也と申します。今日は司会者ということでもここにおりますけれども、司会というよりは、これからJETプログラムを中心とした国際理解あるいは異文化コミュニケーション、国際交流がどういふふうに進んでいくのかなというの

を、皆様と、そしてパネリストの方々と一緒に考えていきたいと思っております。

まずパネリストの皆様の自己紹介を兼ねまして、ご自身とJETプログラムとのかわり、それから、この事業への思いなどを伺ってまいりたいと思います。まずはアグネスさんからお願いします。

アグネス 皆様、こんにちは。アグネス・チャンです。今日はJETプログラムの二〇周年のお祝いということで、本当におめでとうございます。

思い返せば二〇年前、中曽根総理が外国のネクタイを締めて「国際化をみんなで頑張つてやっていきましょう」というキャンペーンが話題になっていた時代だと思えます。

私自身もちょうど二〇年前、大学で異文化コミュニケーション論というのを教え始め



↑パネルディスカッションの様子

ました。その時にJETプログラムがスタートしたんですね。私は基本的にはこのプログラムが大賛成です。たくさんの方々が日本に来る。日本にとって、とても素晴らしいことだし、そして外国からいらした人たちが日本のことをもっと理解できるので、私は国際交流として、文化事業としてはとてもうまくいっているプログラムだ

と思います。

藤井 皆さん、こんにちは。鳥取県副知事の藤井喜臣と申します。JETプログラム二〇周年、皆様方と一緒に祝いしたいなと思っております。

鳥取県のことを少しお話しさせていただきます。鳥取県は人口が六十一万人で、非常にまとまりのある小さな県ではありますが、やはり今、各都道府県とも、地域の活性化でありますとか行財政改革というようなことを、競うようにして取り組んでいくところでもあります。

その中で地域の活性化ということになりますと、鳥取県の場合、やはり国際交流というのを大きな柱にしておりまして、環日本海諸国——韓国や中国、ロシアあるいはモンゴルといった地方政府とのつながりというのが非常に強いところでもあります。鳥取県には、英語に加えて韓国語のALTが二人、中国語が一人、CIRについては、英語圏から二人、韓国が四人、モンゴルが一人、ロシアが一人という配置があります。

JETプログラムは、仕組みや財源などさまざまなハードルを越えて、地方の実情を踏まえて非常に発展してきたと思っております。

鳥取県にとっても非常に素晴らしいプログラムでありまして、これは全国各都道府県、同じことだと思えます。そういった実態・実情などを今日はお話しさせていただきたいと思えます。

グリーン 皆様こんにちは。アメリカ大使館のグリーンと申します。私は九二年から一年間、ALTとして神奈川県でJETプログラムに参加しました。私は高校生、大学生、そして今は外交官として来日をして

いますが、日本の文化・習慣あるいは生活を知る上でJETが最も効果的であったと思えます。



↑レイモンド・グリーン氏

私です。

私がJETに参加したのは大学を卒業した直後で、それは約一六年

前のことです。その時でもJETプログラムは世界中、特にアメリカの大学の中で非常に有名なプログラムでした。今回私が来日した目的は東京のアメリカ大使館にて安全保障政策課長として日本とアメリカの安全保障関係の強化と日米両国の発展に微力ながらも努めるためです。

この関連で在日米軍基地と地域住民との交流促進にかかわっています。JETを通じて得た経験は非常に役に立っています。JETのOBとして、このような素晴らしいプログラムのますますの発展に少しでも貢献できれば幸いです。

直山 こんにちは。直山木綿子と申します。京都市教育委員会から来ました。元々は中学校の英語の教員をしていました。中学校にいた時は、このJETプログラムが始まって、

ALTと一緒に授業をやっていました。

ALTの人はいろいろな学校へ行つて悩むわけですね。「先生とうまいこといかへん」とか「こんなことがあつて困つてるんや」と言うのを、「こんなふうにしたらどう？」というような話を一緒にしています。

今日は辛口のこともお話ししようと思つています。ALTの課題もあるし、成果も含めて学校現場のお話を皆さんにお伝えして、一緒に英語教育というのを考えていく機会になればなと思つています。よろしくお願ひします。

田中 皆様、こんにちは、田中と申します。私もCLAIRの業務の中でもJETプログラムというのは非常に大事な業務でございます。従つて、私も職員は皆日々一生懸命取り組んでいるわけでございます。

私自身について申しますと、今の職務はもちろんですけれども、これまで勤務いたしました地方自治体で、まずJETの皆様方にお会いしました。いずれも皆さん素晴らしい方で、いろいろ助けられたり教えられたりしてやってきました。

直前まで、CLAIRのソウル事務所長としておりました。韓国JETの皆様方は実に素晴らしい方々です。私のこれまでのさまざまな交流の中でも思い出深い交流がありました。

今日はここにそれぞれ別々の立場でJETプログラムに深くかわりになられた方々がいらつしゃいます。皆様方のお話を

伺いながら、今日はまた大いに勉強したいと思っております。



外国語教育の充実

松本 JETプログラムは地方自治体が主体となつて行う事業です。それに三つの省庁——総務省・外務省・文部科学省、そして自治体国際化協会が協力をしているということになっていきます。

まず自治体が「どういう人材が欲しい」という要望を上げます。それを総務省が取りまとめて全体の計画を作ります。そしてその計画に基づいて、今度は外務省が在外公館などを通じて人材の募集を行います。そして文部科学省は、その来日した参加者の研修を行います。自治体国際化協会が全体の連絡・調整を行う。これらが協力し合っているわけです。なお、財源は地方交付税などで賄われています。

さて、この後は外国語教育の充実と地域の国際化という、二つのJETプログラムの掲げる目的について話を進めていきたいと思っております。

まず外国語教育から進めていきます。何といってもALITの経験のある、アメリカ大使館のグリーンさんから、お願いします。

グリーン 私も高校時代には、夏休みを利用して日本に来てホームステイをしました。その時は神奈川県にある大船高校で短期

留学をしました。数年後、JETプログラムに志願した時、幸いにして希望どおり大船高校のALITになることができました。以前習った先生と一緒にチーム・ティーチングができて大変嬉しく、また面白かったです。

もう一点、中国のALITの招致は非常に有意義だと思います。私から申し上げるまでもなく、日本の将来にとりアジアとの交流は非常に重要であり、このような人的な交流は不可欠だと思います。また、日本の若者がアジアの言語を学ぶことのできる機会があることは、将来の日本にとっては非常にプラスになると思います。

松本 グリーンさん、聞いたところではアメリカの国務省の方にはJETの経験者が多いそうですね。

グリーン そうですね。イギリスの外務省と同じように、JETプログラムはアメリカ国務省における人材の育成に大きな役割を果たしています。今、アメリカ大使館の職員の中では各領事館を含めて約二〇人ほどのJETOBが、日米関係の促進のために日々働いています。これは外交の世界だけでなく、経済界、学会でも同じです。JETプログラムは人物的な交流だけではなく、日本の将来を見据えた長期的な投資だと思えます。

松本 藤井さんはどのようにお考えでしょうか。

藤井 私はまず、非常にうらやましいなどというふうに思いました。というのは、どう

も私がこの壇上で一番年上のようですが、私が学生のころにはALITなんて全くありませんでしたので、日本人の英語の先生の発音が本当に正しいのかどうか分からない中で学んでおりました。

どんな具合に授業を進めているのかなというところで、このパネルディスカッションに参加する前に高等学校に行つて、チーム・ティーチングの様子を見てきたのですが、私が見た授業では、ALITの人が主導して授業をやっています。日本の英語の先生は子どもたちに分かりにくいところを日本語で「こうだよ」と説明しておられました。

ALITも子どもたちも会話を基調として非常に生き生きとしておりまして、やはりああいう授業を一度受けてみたかったな、ということをおもっています。

特に、小学校にはこれから一律にすべての学校に配置するのではなく、やはり必要な学校に重点的に配置する。英語が必修になる、ならないという話ではなくて、どのようにかわっていくことができるのかなというのが、やはり地方自治体の関係者の一人として今思っているところです。

松本 さて、アグネスさんはどうでしたか？
アグネス 私もしデビューしなかったら、大学生のころ、JETプログラムがあれば来てみたかったなと思いますね。だって、普通は外国に行くとしたら、一番有名な都市、東京だとか京都だとか鳥取だとか(笑)行くのが普通ですけど、JETの皆さんは、い

ろいろな所へ行けるんですよ。そしてそこで本当に地元の人たちと一緒に生活できる。すごくうらやましいと思います。

でも、ここでJETプログラムの目的をもう一回おさらいしてみると、一つは地方の国際化ですね。もう一つは英語をみんなで学ぼうということですよ。この二つの目標を見てみれば、明るいところと、ちょっと薄暗いところがあるような気がします。私は、地方の国際化にとっては、JETプログラムは大成功だと思います。でも英語教育の面では、私はたくさんJETのOBとお話したことがあるし友達もいますが、その中では、みんな日本に来て、燃えて、英語の先生として「日本人の子どもたちみんなに英語をしゃべらせよう」という情熱を持つてくる人はむしろ少なく、どちらかというと、日本語をもっと知ろう、という程度の心構えで来ている人の方が多いと思います。もう少し英語を好きになる、遊びを通してそれを学んでいくという段階なので、直接成果を上げていくためには、これからのステップがいろいろ必要だと思いますね。

直山 「ALITがいるだけで有効」というのは言っただけでいいと思います。

ALITがいるけれど、それを日本の英語の先生が、どういうふうALITの先生を授業に入れるか、どういうふう子どもALITを出会わせるかによって、ALITがどれだけ有効か。人を有効とか有効でない

という言い方はあまり好きではないのですが、ALITのよさを子どもたちに伝え見てもらうかができるのは、やはりその日本の英語の先生がしっかりやっていかないとけないと思う。いたらそれでいい、というわけではないと思っています。

アグネス 質問していいですか？

私は、できればもっとたくさん受け入れてほしいんです。五〇〇〇人とは言わずに五万人とか受け入れたらいいなと思うのですが、だいたい一人いくらぐらいかかるんですか？

松本 それを調べてみると、ALITにかかるコストというのは、渡航費用なども含めると、一人当たり一年でおよそ六〇〇万円です。例えば鳥取では、六五人のALITに掛算していろいろ合わせますと、およそ四億円かかります。各県で数億円から一〇億円程度の交付税が使われているということですね。これが単純に五〇〇〇人が五



↑松本和也氏

万人になると、ということなのですが。アグネスさん、お聞きになって、この数字はどうですか？

アグネス まあ、できたら三〇〇〇万円位に抑えたら、倍の人数ぐらいは受け入れられるような気がするんですけど(笑)。そうは

いかにいいですかねえ。
松本 それについて田中さん、いかがでしょうか。

田中 確かに今ご指摘のあったような金額がかかっていると私も認識しております。これは、JETの方ご本人にいく分だけではなくて、例えば社会保険料ですか、あるいは研修にかかるさまざまな費用、そういったもの、もちろん含めてという話です。いずれにしても、費用がかかることは確かです。それをどう見るかというのは、特に昨今では、地方自治体は厳しい財政状況でもございますので、いろいろなご意見があるのは私どももよく承知いたしております。ただ、JET、特にALITの方々から来られて、学校での授業はもちろん、いろいろな行事あるいはクラブ活動で、外国人青年と接して受ける刺激というのが非常に意味があると思います。JETの方と触れ合っただけ、自らも先生になったという方がいらっしゃると思いますが、そういう刺激というのが非常に大きな意味があるか、と思います。また、外国に対する憧れであるとか、もともと日本はオープンでなければいけないと思うこととか、そういうこともあります。

それから、世界に日本のよき理解者をどんどん増やしていく。そういうことの意味も非常に大きなものがございます。そういうふうにご考えますと、このJETプログラムの果たしている役割というのは、費用を考えても、なおかつ大きな役割を果たしている

のではなからうかと私は思っております。

藤井 地方交付税というお話がありましたが、最初にちよつと一言言っておかないといけないですね。地方交付税はいろいろな費目にくるのですが、JETプログラムについてはかなり手厚くきております。それは事実ですが、ただそろそろ限界だろうなと思います。交付税も今非常に厳しい時代ですので、少し見直しが入るのかなと思っております。

しかし、そういう中で、三〇〇万円だったらい人が来ないかもしれない。いい人を選べるような仕組みが今後必要になるのかなと思っております。

やはり、JETプログラムでALTを配置すべき学校、どこにお金をかけるかという見極めが必要ですし、今、三年間の契約限度が、優秀な方は五年まで伸びるというようなお話もあります。それに加えて、OBの方を地方の判断で引き続きお願いできるというような仕組みがあるとか、いろいろな工夫改善がこれから必要になるのではないかと考えております。やはりこれからはどんどん増やしていくのではなくて、優秀な人材を得て、その人たちが働きやすい環境をどのようにつくっていくかということが、地方自治体も工夫をしなければならぬ時代かなと思います。

松本 直山さん、どんなご意見を。

直山 JETが始まってALTがくるようになった最初のころは、やはり中学の先生

も、なかなかネイティブが来てすぐ一緒になって英語をしゃべれる方というのがそうたくさんいなかったもので、ネイティブが来るとどことなしに職員室から英語の先生が消えたりとか…。

松本 え？英語の先生が消えるんですか？

直山 そういう方もやはりいらつしたわけですね。ALTが来たらALTが一人で授業して、英語の先生が後ろで見えていたりということも、最初のころはありました。それが、これではいけないと、いろいろな研修を自治体で組んでいきました。チーム・ティーチングをしつかりやつていこう、ALTの先生と子どもの橋渡しを、私たち英語の教員がしないといけないじゃないかと、研修をしながらやつていくと、今度はALTをテーパーコーダーみたいに使ってしまう。「ハイッ、ここだけ言つて。ハイッ、リピートして」。こうなつてしまうと、ALTがまるで機械みたいになつてしまう。さつきアグネス・チャンさんがおつしやつたように、もちろん英語のことで来たのだけれど、英語の教育で来たというよりは、子どもたちに英語以外のいろいろなものを伝えるに来ている。



↑直山木綿子氏

例えば、中学三年生の授業で、ALTに、「あなたが日本に来て、すごく不思議やなつて思つ

たことあるでしょ？何？」と聞くと、「割りばし」と答えました。「日本人は無駄遣いをしている。今の環境問題の中で、割りばしを使うということは許し難い」とすごく怒つたんです。

「そのことを子どもたちに英語で言つてください」と言つて、ALTと私でスキットをするわけですね。それで私がうどん屋さんを演じます。ALTが来て、私がどんぶりと割りばしを持って、「いらつしやいませ」と言う。そしてALTが「うどん一丁」と頼む。そしてALTがおはしを落とすんです。「おはし一本」と言つてまたおはしを持っていく。また落とす。というようなことをスキットして、ALTが「君たちはこうやつて割りばしを無駄遣いしているんだ。どうしてプラスチックのおはしを食堂へ持つていかないんだ！」と訴えたんなんです。

これに対して中学三年生の女の子が「それは違う。私たちは廃材を利用して割りばしを作っているんです。決して無駄遣いをしていない。有効利用しているんです。しっかり勉強してから言つてください」と言い、ALTは「どうもすいません」と謝つたという話です。そうやつてお互いが交流をし合うのです。

今は、小学校にもALTがたくさんいらつしゃいます。週に一回ALTが来ますが、先生はALTが来ない時にクラスの子どもにいっぱいALTの話をするんです。

「ケイト先生はな、イギリスから一人て来

てはんねんで。一人で暮らしてはんねんで。みんな言葉が分からへんところで一人で暮らしてたら、すごいつらいやろ？でもケイト先生はすごいで。自分でご飯もしやはるし、そうやって生活してはんのやで」ということをいっぱい子どもに伝える。

ある時、ケイト先生が病気でお休みをしたんです。すると子どもたちが「何でケイト先生来はらへんの？」「あんな、ケイト先生な、熱出してはる。一人で病院も行かれへんし、寝てはんのやで」って担任の先生が言ったら、「ほな先生、手紙書こう！」って三年生の子どもが言うんです。日本語ですが、一生懸命お手紙を書きました。

そして次の週にケイト先生が元気になってやってきた時に、子どもたちがその手紙の束を持って、走ってケイト先生のところに行きました。ケイト先生は読めないけど、子どもたちが「OK? OK? ケイト先生、OK?」って一生懸命言うと、ケイト先生がその場で泣き出した。すると子どもたちは「ケイト先生、泣かはった！」って担任のところへ走って行った。「ケイト先生なあ、うれしくて泣かはんのやで」先生、外国の人でも日本の人も、みーんな一緒なんやな。うれしいことがあったら泣かはんねんな。みんな一緒なんや!」。子どもはこうやって体験をしながら、ALITの方と何を学ぶかといったら、英語もそうですが、同じ人間なんだ、同じなんだということを体験していく。子どもはそういう貴重な体験を現場でして

いるという、成果の方のお話です。(拍手)

松本 ありがとうございます。名前が Assistant Language Teacher ですから、どうしても英語というふうになってしましますが、さつきアグネス・チャンさんもおっしゃいました。英語だけ教えようと思って来ている先生は意外に少ないと。

アグネス そうですね。そういうと何か趣旨に反しているような感じですが、だから JET プログラムも正直になって、本当は本気で英語を教えようとはしていないかもしれないって、どこかでみんな認めた方がいいかもしれないと思います。もしまだ認めたくない、あるいはやはりその夢を持ち続けたいのであれば、プログラムのやり方を、もう少し本気で考えないといけないかもしれない。英語を教える場合ではね。

国際交流の場合、あるいは人間と分かり合うというのは、とてもいいアイデアですし、そして国際貢献として日本が全世界の若者に、「どうぞ日本に来て、私たちの国、私たちの子どもたちと触れ合ってください」と、そういうチャンスを与えてもらっているということも、大国としての振る舞いとしては素晴らしいことだと思う。

でももしそれと同時に、本当に英語のプログラムを何とかよくしたいという思いを捨てていないのであれば、ちゃんとした成果がどのくらいあったのか、何がよかったのか、それを調査した上で研究して、そして新しいカリキュラムを生み出さないといい

ない時期でもあると思います。本当は五年、一〇年、一五年、二〇年というようにやるべきだと思うのですが。そこから教科書、そして本気で学校の中のプログラムに反映していかなければ、JET プログラムの評価は、どうしても今私たちが話をしているように、文化的な面になってしまいうんですね。

本気でこの調査をやって、データを集めて、そしてやはり日本も国際大国なので、中学校の義務教育が終わった段階でできれば何とか英語をしゃべれて理解できるようにもなってもらいたいですね。

それをどうやって JET プログラムに生かしていくのかというのは、点になっているすべてのよさを、そろそろ線につなげて立体化していかないといけない。この二〇年、毎年自治体が出した大変なお金も含めたその成果が、これから残せることこそ文化の交流だと思っています。

松本 実際に JET プログラムに参加しているらっしゃる ALIT の方のアンケートがあるのですが、「ある学校ではまるごと授業を任せられるのに、別の学校では、自分がなぜこの教室にいるのか分からないくらい役割がないこともある」というような、学校ごとの差がある。あるいは「自分は英語が母語であるけれども、英語を教えた経験はないのに、いきなり日本の先生と一緒に教壇に立つことにはとまどいが大きい」という、それぞれ ALIT の皆さんにもとまどいがある中で、この制度は二〇年続いてきている



地域の国際化

ということですが、田中さんは、今こういう声に対して何かご意見はありますか？

田中 私はそもそも教育の専門家ではありませんので、教育の先生方のご努力を大変立派だと思っておりますが、必ずしもよく分からないところもあります。

いずれにしても、皆様方がおっしゃっているように、結局、勉強というのは自分がやる気になってやらないとできないということだと思えます。私自身も最近いろいろな言葉をちよつと勉強しましたが、とにかく一生懸命やりたいという熱意を自分を持つこと、そしてそれを単に習っただけじゃなくて、家に帰って自分でやること。そういうことの繰り返しで初めてできるのだと思います。

ですからALITの方々も、学校の先生と一緒にやって子どもたちにモチベーションを与えることが必要なことだと思えます。それをできるようにする方法として、先生方がおっしゃったようないろいろな方法があると思えます。私もCLAIRでも研修を行ったり、いろいろなことをやっておりますが、十分でないというご批判も当然あると思えます。そういった考え方で私どもとしては引き続き、英語教育ということについても、一つの重要な課題として取り組んでいく必要があると思っております。



↑アグネス・チャン氏

「家族と一緒にご飯食べてくださいよ」と。そういうふうになるのが私

松本 ここまでは学校教育現場について中心に見てきたのですけれども、今度は地域社会に目を転じていきたいと思えます。

地域の国際化を進めてきたJETプログラムの歴史について、グリーンさんはどうご覧になりますか？

グリーン JETプログラムは、外交の立場から見ると一番成功しているプログラムだと思えます。何万人といる各国のJETのOBが、家族だけではなく友達に、日本での経験を伝えて日本への関心を高めることはとても大切なことだと思えます。

逆にCIRとALITが各地域において、アグネスさんがおっしゃったように、地方の生徒と交流ができることも非常に素晴らしいことだと思えます。

アグネス 日本のファンがいつぱい増えて、世界各国で日本のPRをしてくれる。そしてみんな興味を持って日本に来て、また新たな日本のファンが増えて、ということなのです。

子どもたちが大きくなって、どこの国へ行っても「あの時は本当に日本にお世話になりました。本当にとても日本人が大好きで、日本が大好きです。どうぞ私の家に入

の最大の夢なので、まさしくこのJETプログラムの草の根のところから、だんだん花を咲かせていくんだなと思って、すごい胸が温かくなるような話でした。

松本 鳥取県はアジア各国との交流があるとおっしゃいましたが、どうぞご覧になりますか？

藤井 鳥取県でも、CIRと一緒にALITが地域の国際化ということで非常に活躍しています。二〇〇五年、鳥取県で生涯学習フェスティバルという行事を文部科学省と一緒に行ったのですが、その時にみんなで国際交流テント村というものを作ってくれました。

鳥取県には一二カ国のALIT、CIRがいるのですが、それぞれが「今日はアメリカの日だよ」とか「今日は韓国の日だよ」ということで、それぞれの国の文化や料理を提供してくれました。踊りは得意な人もそうでない人も演じてくれて、集まってくれた鳥取県の子どもたちが非常に喜んで、そういった文化に触れておりました。

やはりこれからの交流は、子どもたちいかに交流をつなげていくかというのが頭の中にあるので、そういった視点で彼らの活躍に非常に期待しているし、それを私たちも一緒になってやっていかないとけないなど思っています。

松本 藤井さんのところでは、英語圏というわけではなくアジア各国のCIRの方も活躍なさっているということですが、

最初、二〇年前には、このJETプログラムは、アメリカ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランドといった英語圏の四カ国からの招致で始まり、続いてカナダ・ドイツ・フランスなど、さらにアジア・中南米・アフリカというふうには、だんだん地域が広がって、現在全体では延べ五五カ国になったということなんです。今年二〇年目を迎えて新たに招致した五四番目そして五五番目の国が、パキスタンとケニアです。このケ

ニアから来た国際交流員、ジョン・オポンドさんは、三重県での勤務になりました。実はオポンドさんが赴任した三重県というのは、居住している外国の方の比率が日本で三番目に高い県なんです。どれくらいかといいますと、県民四〇人に一人が外国人ということなんです。いろいろな意味で三重県というところは国際化が進んでいる地域だといえると思うんです。

ここでアグネスさん、いきなりクイズ。この国際化が進んでいるといわれている三重県、何カ国くらいの外国人の方が住んでいると思いますか？もう当てずっぽうで、ポイントとおっしゃってください。

アグネス えー…。じゃあ一・二カ国。

松本 実は、三重県にいる外国人は四万八〇〇〇人、九六カ国です。驚きますよね。

アグネス 驚きます。でもよく考えてみたら、これが将来の日本の姿かもしれないですよ。だって少子化で、人口を維持するために、二十数年前から毎年一〇〇万人

ぐらいの赤ちゃんが足りないんですよ。だから今もう二〇〇〇万人ぐらい足りないんです。

そうすると二〇〇〇万人を今から生むというのは無理なので、それを維持していくためには、やはり外国の方に来ていただく活躍してもらおうというのがこれからの姿でしょうから、これからはどうやって周囲と付き合っていくのかというのは、すごく大きな課題ですよ。

グリーン 私自身は横浜におりました。当時からでも横浜は国際的な所だと思いましたが。個人的には、移民受入れの傾向はよいことだと思えます。アメリカは基本的には移民の国家であり、それはわれわれの一番強い点だと思えます。

もちろん地方自治体と政府の組織にとつては課題も多いと思いますが、長期的には日本にとりプラスになると思います。

松本 田中さん、地域の国際化って今どういう状況にあるのか説明していただけませんか？

田中 地域の国際化、いろいろな交流ですとか、あるいは地域の住民が参加したイベントとか、さまざまなのがございますけれども、確かに最近の大きな一つの流れとしましては、外国人の増加に対する問題というものがございます。

外国人の登録者数は、現在約二〇〇万人だそうですね。この一〇年間で約一・五倍になったと聞いております。またアグネス・チ

ヤンさんからもご指摘があったように、わが国の人口減少傾向もございませ

すので、今後さらに外国人住民が増加するといわれています。

従って、最近では多文化共生というのが大変大きな課題となっております。

例えば具体的には、外国人住民に対するコミュニケーションの支援ですとか、あるいは住居・教育・医療防災という面における生活の支援。あるいはもつと細かくゴミの出し方のような生活のルール。さまざまな面での支援というのが多分化共生という意味で必要になってきているわけです。それが地方自治体における大きな課題になっていると私も思っております。

松本 実際、鳥取県ではいかがでしょうか、藤井さん。

藤井 鳥取県も調べてみると、この一〇年間で外国人登録者の数が二倍に増えていました。一〇年間で二倍というのはすごいんです。また一〇年たてば二倍になるか、三倍になるのかは、よく分かりませんが、ごく自然な形で進んでいっているのではないかなというのが率直な意見です。私は県庁に入つて三十数年たちますが、県庁に入ったところは外国人の方で本場に珍しくて、もちろんアメリカの方、イギリスの方も珍し



↑田中事務局長

かったのですが、中国の方でもほとんど会うことはなくて、大学に留学生が数人おられるだけでした。それが今ではもう非常に自然な形で入っております。鳥取県に鳥取砂丘という日本一大きな砂丘があります。砂丘そのものは天然記念物なので植えられないのですが、砂丘の周辺でサツマイモを植えているところにサツマイモ掘りに行っただけです。小学生も来ていましたし、留学生も来ていましたし、地域の人も来ていましたが、本当に一緒になってサツマイモ掘りをしていて、何か全然違和感がないんですよ。そのぐらい自然な形で地域の中に浸透してきているな、ということを感じております。

松本 アグネス・チャンさんは、トラブルの部分も具体的にいろいろご存知だと思えます。例えば、こんなことがあって、こういう工夫が受け入れ側にあつたらいいの、というアイデアはありますか？

アグネス 日本はある意味では特別な国だと思います。私が最初に来た時も、いろいろなことに苦労したんですよ。しかも日本の皆さんはすごく控え目なので、なかなかすぐお友達になるのは難しかったです。遠慮してなかなか叱ってくれない。それも私のどこが間違っているのかというのがよく分からなかったり。

でも、こう言うとかかえこひきしていいと言われるかもしれません、とてもい

い国です。私はそう思います。

松本 外国の方が、なじみやすいということですか？

アグネス 基本的に心が優しい人が多いと思います。とても礼儀のある国だし、そういう面では正直言って、日本に来て私は差別された思いはあまりありません。だからこそ自分は絶対、どこへ行っても人を差別しない。差別されても慌てない、あるいは憎まない。それはやはり日本に来て、私の違いを認めてくれた日本の皆さんと触れ合うことができたから、自分は少し強くなったと思います。

確かにいろいろなトラブルもあるでしょうし、お風呂の入り方や、ゴミの出し方、あいさつの仕方とか、いろいろ私も間違ったことやトラブルもたくさんありました。それを乗り越えたらたくさんいいところが見えるんですね。

何か大福みたいです。外を見るとただの白い塊に見えるんですけど、噛んでみればおいしい餡がある、私はそれが日本人だと思えます。

松本 大福の一人としてうれいす(笑)。本当に、ありがとうございます。

直山 さん、京都ではいかがですか？

直山 京都市は、区民運動会というのがあります。だいたい小学校区ごとに、秋に地域で運動会をするんです。小学校を会場にして、その地域に住んでいる方たちがみんなで集まって運動会をするんです。町

内に住んでいるALTが来たり、あるいは私が住んでいる町内での運動会があると、一緒に勤めていたALTが参加してくれるんです。すごく不思議な光景です。京都にはお寺がたくさんあるのでお坊さんも走っているし、一方でALTやネイティブも走っている。そのALTとお坊さんが一緒に大きなデカパンツをはいて二人三脚で走るとか、おじいちゃん、おばあちゃんがALTの人に一生懸命ルールを説明するんですね。英語ではしゃべれないけど、日本語で一生懸命伝えよう伝えようとする。ALTは「何言うてはんのやろ？」と思いつつも、一生懸命聞こうとする。そういう中からお互いのやりとりが生まれてきて、ALTも日本のことを理解してくれるし、地域の人もALTのことを理解してくれるというようなことを、わりと京都市では見かけますね。

松本 最後に、このプログラムに対する感想あるいは提言、期待するもの。それを皆さんに一言ずつ伺っていきたいと思えます。**アグネス** 私はJETプログラムがなぜ成功しているのかということは、一つはやはり人間を重視しているからだと思います。人間の交流、それを重視しているからこそ国際的なプログラムとしてはすごく成功したと思うんですね。

もう一つは、そんなにギチギチしてないから。わりと緩いところがあるから成功してきたと思います。例えば目標があつて、これを達成しなければ来年からはもうや

めまず、というような厳し過ぎることは言わない。きつと長く続けば意味は分かってくるはずだという、そのみんなの広い心構えがこのプログラムを支えてきたのではないかなと思います。

そしてJETプログラムの一番の成果というのは、平和教育の一環として成功していることだと思います。それは人間の認め合い。違いがあっても友達でいられる。そして一緒に楽しんだり、違いがあっても、どうしても同じにならなくても大目に見よう。そういう学習ができると思うので、ぜひJETプログラムの中の理念の一つとして、「日本の平和教育」であると、そういうふうにはつきりと言ってくださいることをすごく期待しているところです。

藤井 やはり自治体の関係者として思うのは、雇用主という言い方が正しいかどうか分からないのですが、JET青年を受け入れて働く環境を整えるのは地方自治体を中心ですが、私はこれからALITの活躍の場というのはどんどん広がっていくのかなと思っています。というのは、私どもはALITがいなかった世代で、きつと三〇代の方は学校でALITと接した人たちなんですよ。中学校の生徒がALITと接して、自分も英語の先生になったという話がありましたが、きつとこれからはALITと学生のところへ接した人が必ず英語の先生になると思うので、ALITと一緒にどういう授業をしたらいいのかというのを自分自身が学ん

でいた立場で実践することができるとかと思っています。

それから、子どもたちにとって外国の方が身近にいて接することができる。彼らは非常に人懐っこくて、子どもたちがいると気軽に声をかけるんですね。変な言い方ですけど、日本の大人は子どもに「おはよう」ってなかなか言いませんが、外国の青年は道ですれ違ったりすると「おはよう」と簡単に言うんです。そういうところは、非常に子どもたちが学ぶところがあるのかなと思っておりました、これからぜひ期待したいし、一緒に頑張って頑張っていきたいなと思っています。

グリーン この二〇年の経験でみると、JETプログラムは国際交流計画で類をみない大変な成功例だと思えます。多分世界中のこのようなプログラムの中で一番の成功だと思えますが、一つ提言があります。ALITはプロの英語の先生ではないですから、彼らの一番強い点は、日本人の生徒のモチベーションを助けることです。あまり話す時間がありませんでしたが、SEAのような、その特定の分野で、例えば芸術・科学、といったクラスを英語で教えれば、学生の英語の能力を向上するだけではなく、その分野に対する関心・興味を高めることにつながると思います。

直山 まず一つは、やっぱり学校にALITに来ていただいている中で、私生活においても、英語を教えていただくという立場に

いる中でも、すごく課題が多い。それを対処する行政も、ものすごく時間がかかっているということがあります。ALITの採用には必要な資格というのがないようですが、そこは少し考えていかないといけない部分なのかな。人物交流プログラムであるけれど、その部分がこれからは課題だなと思っていることが一点。

それから、このJETプログラムでは、かなりの費用をかけているだけに、総務省、外務省、文科省でプログラムの成果と課題という調査をすべき、そして国民に説明責任があるなと思っていることが一点。

それからもう一つ、子どもの立場から言うと、子どもはALITを知ります。イギリスのケイトを知り、カナダのジョンを知るわけです。するとジョンを通して、ケイトを通して、イギリスやカナダを知る。ALITを通していろいろな国を知っていきます。そうすると子どもは、カナダやイギリスやシンガポールやオーストラリアに対して悪い気持ちは抱かないんですよ。憧れとかいうのではなくて、すごく親しみを覚えるんですよ。子どもたちが大きくなった時に、そんな国とけんかしようとか、何かしてやろうとかそんなこと思わないですよ。

カナダやオーストラリアやシンガポールで何かがあった時、災害があった時、事件があった時、「ジョンはどうしてはるやろう、ケイトはどうしてはるやろう」ということを子どもたちは心配します。こういうことが草

の根の国際交流なんだという具合に、ここにJETプログラムの価値というのを、私は学校の中のALTを通して感じています。

田中 私が一言申し上げたいのは、JETプログラムというのが、海外でも実に多くの方々に支えられているということなんです。

それは日本語を教える大学の先生方であったり、あるいはJETの面接を引き受けてくださっている各地のボランティアの皆様方、あるいはJETに参加して母国に帰っている元JETの方々、そしてそういうJETの方々や交流したり、あるいはJETの方々の善意と熱意によってこのプログラムは支えられていると思います。

そういった方々の損得抜きのご貢献、あるいはそういった気持ちというものがJETプログラムの一つの大きな特色であると思います。そういう意味で、このJETプログラムが日本の大きな国際交流の資産というかインフラであろうと思います。ですから、ぜひ皆様方でこれからも支えていただきたいと思えますし、また私たちも一生懸命努力をしてみたいと思っております。

松本 どうもありがとうございます。このJETプログラム二〇年、これからも意義あるプログラムがより変化して、そしていい形で継続されることを私は今、願ってやまないところでございます。

これにてシンポジウムを終了させていただきます。(拍手)

特集

JETプログラム 二〇周年記念写真展

式典に合わせ、JETプログラム二〇周年記念写真展「二〇人の肖像で見る二〇年」が開催され、多くの方々が表示した写真に興味深く見入っていた。

この写真展では、EPA (European Photo Agency : ヨーロッパ写真通信社) 日本支局長のエバレット・ブラウン氏が撮りためたJETプログラム(元)参加者の写真二二点を展示した。

エバレット・ブラウン氏は、東京を拠点に活動しているフォトジャーナリスト・文筆家で、作品はインタナショナル・ヘラルド・トリビューン、ニューヨーク・タイムズ(アメリカ)、ロンドン・タイムズ(イギリス)などの主要メディアで定期的に取り上げられている。

同氏によると、このフォトシリーズは



↑癒しの音



↑カウボーイ侍

「Pacific Friend」
(内閣府所管の社
時事画報社刊)の
編集者に依頼さ
れ、JETプロ
ラム一五周年記

念事業として、活躍しているJET参加者の写真や記事を紹介するためにスタートした。この仕事を引き受けるまで、JETプログラムの印象といえば、単に外国青年を日本に招致する教育プロジェクトと想像していた。しかし素晴らしいJET参加者と出会い、インタビュアーや写真撮影を重ねるうちに、JET参加者がいかに地域の国際化に貢献しているかということに気付かされた。このドキュメンタリーフォトプロジェクトを通じて、多くの読者の目と心に、JET参加者のメッセージを届けることができれば幸いである。



↑風を読む

なお、このフォトシリーズは当協会のホームページ(<http://www.jetprogramme.org/j/index.html>)からご覧いただけます。